刀奈蔵山集

全

へ 5
1911

門八 5
號 巻

宗像神社文庫

刀奈義山引

弱中ゝも襟まをつゝぬるれむけせゝ
東月十三りの夜べう荒ふゝにさむうま
しっぷも嵐吉る妹もいまは桃陳ふ
疵ゝるも逝きに蓋精舎を多いゝ
へしより先んまをする酒の目ともに
本情とあゝるすゝもゝ四五一晌
よゝ物ゝ芭蕉翁の昔を泊ゝるひみ

宗像十四郎富仁家蔵書贈呈
藤原文庫

藩家の哺を幻住庵へとんで源川を
わたれば清瀧川の底なるを見る
猿蓑乃評は芭蕉翁の俤よりつ
ゝをとゝ一句ゝこゝろ抜といへるまく
傾治のふかきに事よせて人々情
ふかく其動のよしも十人の調和と云
い九人のうち地を負てもたゝ翁一人を服
するに付て横行の蟹の逆宛とふんぞ

嘲のとられもせんと嘲まとふ八ゝん
雑耳ひろひてゝ鉢ゝまの赤き
姉とまる芭蕉翁の発句を十
銭をなゝゝ千鳥のひとこゑをなゝゝ
千鳥なゝ野川こえて鉢ゝき 其角
今お年寄ゝ鉢たゝ嵐雪
ひゝたんハ女化るへゝ鉢てき 桃隣
蟻ゝ人の発句に蟻ゝたゝよ 去来

きられて雲間のつゝみ部とう結跡をまゝとゝて
ゆきの八十日の内ほのゝ四子小松へまゝふゝ
待り論蔵を出りて回廊よりわい雪乃
風ゝし雪をゝゝ羽織よりゝ雪ゝ
ゝゝ梅ゝゝゝゝ田楽の匂ひ
一盃ゝすゝむる桃陰の夜色ゝに著
嵐雪の奉納の一句に十面ゝゝを始
ゝゝまゝて猪馬をたゝゝて待ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
宴に新の名残をとゝめゝゝゝ芭蕉翁
小越の旅寝にあゝて海の吟あり浪化居
士句ゝゝ信仰の一集をゝゝゝ立あ
ゝゝ去来義仏をゝゝゝゝ江戸門
義氏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ保ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

蕉翁去て後ひさしく翁をしたふ人
向篤の志ありて門人のむかしをなつかし
せまほしかるにつけて北國其俊覚ならぬ
まくら筆も一つるにみやひ傳るよし我
跡して心あるもあらぬ筆をえらんで撰集
乃餘力としこしのとなみ山に陣
をとゞめ風しく綿柳の麾をとる
つゝ下知する事をおもへふのミ

となみ山の表

こからしや沖よりさむき山のきれ　其角

うきところて生るふゆ麦　浪化

来春の風呂にたてるん木具揃て　嵐雪

家をこのむにくらう旅ひとり　桃隣

山鼻に来る人拾てしける　去来

きさみなまぐさ入るらんかく　角

蘇のゐ小刀ぬいくゝへをの　化代
ちこに嵐のうちかあをを雪
有明乃沼よ鏡をゆくゝ　隣
書羽織ゑくゝはまるくゝつき　来

冬

山家の不破の笑風ゝ雪れ中　岩翁
初雪に玉簡ゝ来のやうけ武　晋子

すり針や今ゆるやうよゝつの雪　亀翁
ちゝはすに雪の風鈴のまをとな　仆我
初雪や焼沼よ女乃雀弥　紫紅
うくまを家や行再ゝ角ゝ巾　壽吟

春

やゝ入やひとつはあるうゝ和尊　晋子
遠よつぬるこゝろいも武岩の鴨　岩翁

地陸や四隣の降る程こそ　尺半
彼岸まで波寄ぶらりぶらり　彫棠
夢の野や未だ八延乃義会せ　沾徳
やぬ入分勝月に酒の酔　寿吟

蛙

和の為よりけ戸毛のるる此夜明れ　許六
男乙女此夜て出るものよりの丈　彫棠

瓶石の苔や社冊にあのうけ　分我
蛙立て火鉄やりうち鳴ること　岩翁
涼しさや恍て水のうちとみ　晋子
涼さ舟揺さうし傳と神へ切　秋風

秋

星合や離別の中ぬ引て丸ん　山蜂
曦を引　板屋よりうる書もうれ　妹色女

[illegible]の[illegible]れたり合も[illegible]舟遊山　紫紅

寝ると家に[illegible]　未陌

水竹蝶一[illegible]　晋子

丁の[illegible]る[illegible]乃工　同

元禄猪頭屠進之日　其角

去来丈演説[illegible]

砺波山の擬葉[illegible]

連句　[illegible]

[illegible]の間を[illegible]　曲翠

鷹[illegible]　浪化

松茸に[illegible]を[illegible]　正秀

箸に[illegible]　即高

名月[illegible]　胡故

湯治の[illegible]　翠

とも加ふるもあれ金銀をひろげく　高
去ん宰人のしよくん養ひ　秀
反古をもちつゝこれゆる文の端　翠
ぬるのをそこをあくめ　故
さしひ刀真加もてあれさいてて　秀
戸をけ陽よりさを震所　高
授桶の家に風呂あるを月ゝ　故
すまを庭を下ん川水　翠

ゝしい所のゝゝれる蜂ゝれ　高
豆腐ゝ蒿乃ゝまゝきいなる　秀
今ゝやる庭ゝてあゝを五六ゝ　翠
長ゝしゝの股立をゝゝ　故
陽炎ゝちゝゝてあゝに　秀
ゝゝ四ゝゝ鍋ゝてゝゝ　高
蜂のゝ良をゝゝゝ　故
玉器ゝ蓋ゝてゝゝ行ゝ　翠

下野の温泉に湯あり　高
越前の国の道しるべ　秀
行遠しと雖ども　翠
月を見て　故
翠簾のうちにて　秀
浴室に船路を意乃一景　高
ひとつ事あり念仏　故
五百羅漢　翠

腹掛を今朝の鄙よりも　高
旦那の家にて門をたく　秀
柴積んで子を養ひて　翠
きのふ古き孫をひろう　故
ちやらくと花見の通る　秀
武士に例る市乃春　高

浪化　一　正秀九
卧高　九　胡故八

蔦ヶ朋日さびや竹閣子　浪化
礼者うちくく春の静さ　去来
やぬ入のゑんやけ似合ふらへて　同
又時の雨ふるなる雨　化
火燈阿弥もちうれの月　同
ひろい葉を九口ひろう　来
蟻人よ鍬をふり回金道　同
ひうの奥き六月北東　化

常なる網を一ふり引ちぶ　化

小屋数並ぶ城乃裏町　来

謂分乃ちらと起る流星　同

物咲うめく立花やす　化

年中我れの内ち新蕗　同

いせの狀日代いうき妻　来

上紬代未鄙合羽と傘ちう　同

汐屋の魚遠ちハつきうや　化

各月のうやり西ようちあ　化

一アてもなき梨子の切地　芭蕉

玉味噌の信濃よかる矩乃風　同

ふ見れ寺を母屋より指する　来

右のまた振いたもち強よかり　同

点うけうやるお役乃文　化

は宿をまいて通る鮎の鮓　同

青田う孫りて夕立ぬう鶏　蕉

平めなる石城あるる水場　蕉
給仕なきせるる更の食喰　来
月ふるき夜の拍物を星てんる　同
聖堂棚ちらほらと窮屋　化
志の姫万を踊よ出せ　同
まるるるかす古屋の傍宰　来
桑子といへい温もひるる　化
ふと切りに京ふるこ雲　蕉

蒼みるる杉ちの姿の咲こ月　来
四五人こ月る信長宗な　化
新る町のふれ秘古能　蕉
いつもも春に去ふるる中　来

浪化　十五
去来　十五
芭蕉　六

こゝろ乙変のむ月加変ル金屋
蛙寝すたまく蕉翁の百ケ月
よ遠信れハ句空北枝ゝ猶を
まゝき孫こゝ自ル作若を坊こす

即興　北枝

向陽ゝ筋のうすや梅のこゝ
ゝ氷よ志ゝけをつくいけ　浪化
田を画ゝるの鞍蓋こゝらへ　句空
石つゝ方へゝやゝうゝ岳　林紅
回水ゝ二番こゝ月の彩　牧童

梧桐落るを秋のまちあ　筆
ぬかるを形義よハ世のうらう　化
遠うるるにいろい目をむく　枚
借屋をもとの私の地をつけ無　紅
袷洗ふてうちの旅ふら　空
うらうらして行のも高れら　枚
笑ふて海を途なる乃礼　童
地弥まる内ら雨の聴あら　空

ゆるい魚なるうるをおす　化
すかまの同じ多を炉のう通　童
反るもまけるいうへする月　枚
ちるまにるほるの戸を明ふ　化
欲るめり吟ふ熊地語ひ長　空
さうんうる無異ひ一ら志ふけ　枚
めるるるた大ひ尾をふる　童
裏白のうるるるるるるるら　空

四方遠くなる蓬乃辻堂　化

往昔式家祇の連歌たるぶ　童

蓬き宿るまろ屋の冷い海　枚

あつけふふかん蓬て運ぶ　化

一茅いほと結ぶ頭北まれ　童

うて寒き浦草一茅よ店ちり　枚

けをい蓬ふるや移の垂石　化

つくと月白の陰る月ちり　童

蓬のうちを鉢ときり　空

蓬刈の蓬商る蓬を蓬て　化

ひくふる菓ふなど蓬よりる　枚

上一つねいく茅するひちかん　空

船ゆる蓬よ肝つすす君　童

きれいう打てる蓬ちり勝よて　万子

海苔ふてこうや百日の蓬　紅

北枝八

浪化八　句空七
林紅三　牧童八
万子一　筆一

追悼の句

去年の神無月翁の辞世
給ふ事も越路のうらうらめ
やう日数へて雪えんめまして
義仲寺へ向ひ埋もれ
ぬらぬまの晋子の終焉の地
なるべし八今ふたたびらめ

蕉翁新墓乃ゆめや　都雪　句空
うゑ木やけ毎に深き墓の文字　浪化
冬籠りき沢ふ所別れ　万子
風渡る枯葉に埋もれ雪の舎利　妹之坊
黒衣岩代の形見や寒れ跡　四睡
風と化すたちまち神の問ふ毎　平交
車屋に並ひ泣く冬の月　宇白
獨言いつくやむ屋小夜時毎　芦葉

瘦せて終よわ虫花　壽仙

初雪や扇ふけなる墓乃会　呂風

白玉も湯の名なりあつき　林紅

閑居よ蕎麦の実ちるあつさ　北枝

蕉翁の落柿舎に偶居して客三句の情をむすびて立うりあるとうの序詞

去来

屋ぬしは蚊こけ出る所の暑さかな　泥化

世捨人の門なるすゝ立　芭蕉

歩行者指を振の人と咄まして

かたぐ〳〵の間ひとを問　之道

半時ばかりの夜のうちる月の入　文州
火乃ちらくはを　ゆくもし　支考
軒ばを雪の遠のほるふんか　惟然
花ぞともの花をあるじあり　地童
切ぎぎ富士ん屋ぎ世波やま　聖明
うらうら生ぎを乃ちり　東
おの命を鶯のとまぬうちり　乃
あうまいけんぎのまや　州

ちらちら風を雪をけぎを　者
こはらくとうとう春乃雲　樊
加川の流ぎたるを月夜　童
雪ちらちらも軽そのうく　明
百ぎふ色の木陰の店屋の　乃
菜種畑ぎをんぎす　東
けちに揚歳ぎふの春　州
鶯陽の三年けぎうぎ　者

胡の角もまたこれを切せり　發

餅つきたるけさく汁粉こしらへ　壹

まこと板の蓋て一面よあるほと　月

偖上いつくめるけたつめる　反

菓小敷よろ此中酒のすんうと　末

多私こつたと私をまあたり　廿

此夕月我此ばかりとうと　考

とうる島のたまうとうと　發

雨宣つく鉢の屋りけるうと　壹

四月一日市の小屋無　明

此夕此化あるれ去るうち　反

むこと男れたる換物　考

此屋此里下りて涙くみ　廿

此こうまこうら地のうち入　蒸

あの番此暫くせるあ　發

月うし一日雨はんつる　明

去來四　芭蕉二
浪化一　支考五
之道五　惟然五
丈艸五　野明五
野童四

百合ゆりの人形

嵐青

うしろ髪のこるあきの其継
末繁取庭もおよるもうてて浪化
九月五夜の月ちらしの呂風
紫陽花の色ちらしの林紅
村をこれきてしかれ一軒夕兆
寝ぬるをふせやこもの路健
多繁ちて同ぶかるべく青

入らるゝ物ある玉あり　継
そうんのうせんなりける　化
金屋城のみやせる秋の月　風
月代見るゝ自の生りある　紅
まろゝと女房を生へて　兆
此國いんまれやたりける　健
学れ餅の鳥ゝを明まり　青
うゝに眠る春の取化寮　絶

板の家れるゝ赤ゝて　化
神よりの月結ばりまり　風
いくゝれも大名流の絶京　健
言ハ過分朝起をすゝ　青
湯つを等ゝけるゝ行の語　継
顔の上言ゝる新白髪　化
しも伽ゝ寺寺ゝ　紅
此舞ゝるれハゝ　化

一両日雷鳴ありて込れなり　青
夜に入りて雨降る　玄明　健
村切り役の人見つけて　風
四のつぼにうち通り流　継
ちん物の事預かり春屋　化
数をとられ人ら紙子　紅
ぬをかりて見るあのもの　継
青ひ金翁のつくあんとう　化

鼻ひの鼻よりき　紅
半代債の銀をとりてく　青
ぬしより三日の姫てをなり　兆
あるひのやに苦りとる　風

嵐青　六
其継　六
呂風　五
浪化　七
林紅　五

夕兆三　路健四

賀刀祭義山撰集

風や劔と振り砺派山　去来

元禄八乙亥歳暮春上澣

正竹書

京寺町二条上ル丁
井筒屋庄兵衛板